

島嶼研だより

No.89

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

2025 年 3 月

主な記事

奄美分室設置 10 年：設置当時を振り返る（河合 溪）	p1
学生奮闘記「甌島列島での植生調査」（金子俊太）	p3
フィールドこぼれ話「結いの島で奄美分室設置 10 周年を迎えて」（谷口光代）	p9
連載 世界島めぐり 第十二回 「ビスマルク海の都市近郊の離島」（土井 航）	p10

奄美分室設置 10 年：設置当時を振り返る

国際島嶼教育研究センター

河合 溪

令和 7 年 2 月 15 日に国際島嶼教育研究センター（以下センター）奄美分室設置 10 周年シンポジウムが開催された。奄美分室（以下分室）設置にはセンター長としてかかわっていたので、設置までをここで振り返ってみたい。

平成 26 年にセンター長に就任した時は長嶋教授（当時）がセンターを定年退職される年と重なった。当時の鹿児島大学は簡単に後任人事が進む状況ではなく、大学の方針に沿っている理由がなければなかなか人事が進まない時期であった。大学の方針に合わせたセンター構想を描いて後任人事を進めようと考え、センターの将来構想を練った。基本はアジア太平洋地域を対象にするが、海外の活動は環境が似ていて旅費が比較的抑えられる東南アジア諸国を中心に、国内は奄美大島に拠点を作り、そこを拠点に教育・研究を進めるという構想を描き、これに合わせて人事を進める方向とした。早速、当時の専任教員の大塚准教授（現教授）と山本准教授を居酒屋に誘い詳細を説明し、センター

内の承認を得た。

奄美分室の構想にたどり着くには幾つかの布石があった。鹿児島には多くの島があり本学の特徴と思っていたが、本学にはこの地域に拠点といえる施設がない一方で、他大学の拠点活動のニュースは聞こえてきていた。なぜ本学には拠点がいないのだろうかという疑問と共に若干の悔しさもあった。奄美には以前医学系の施設があったが、廃止になった歴史がある。その後、奄美に拠点を作る構想は幾つかあった。私が着任してすぐには理学部の塚原教授（当時）が奄美大島に宿泊施設と実験室が併設された黒潮研究所（こんな名前だったような？）設置を概算要求に申請する計画を立案された。実現しなかったが私はワーキングメンバーになっていた。その後、本学理事と立ち話をしたときに、理事のほうから鹿児島県島嶼に本学の拠点が必要ではないだろうかという話をしたことがある。これらの経験を経ていたので、分室構想は進むのではないかという実感を得てい

た。

構想を進めるために、本センター運営に協力していただいているセンター内3部会の部会長に説明し助言をもらいながら構想を具体的にした。その後、担当理事と学長にも説明と了解を得ることで大学の構想に一層沿うように分室の絵を描いていった。

鹿児島県島嶼は生物多様性が高い地域なので、動植物の多様性を専門にした研究者が多く在職していた。当時は生物多様性研究の概算要求の申請を進めており、この申請代表の理学部の鈴木教授（現島嶼研特任教授）と話す機会があった。比較的融和性の高い二つの構想（分室構想と多様性研究）を融合する計画で合意し、修正した概算として進めることにした。分室を設置しそこを拠点に多様性研究を進めるという案である。最初は専任教員1名と事務補佐員1名という構想であったが、合流したことで特任教員と特任研究員も分室に配置できることとなった。

文科省にも説明に行ったのち、奄美出身の桑原教授（当時）や担当理事、事務職員と共に奄美市役所に構想の説明と協力をお願いしに行った。その時の緊張した雰囲気と意見交換した内容は今でもよく覚えている。常に相談をしていた東奄美市総務部長（当時）とは現在もたまにお会いするが、その時のやり取りは今でも酒の肴になる。これを機に、奄美市から施設や様々な点での御協力をしていただけることになった。色々な施設を見せていただいたが、拠点になるためには町の中心にありホテルから気軽に来られるような立地が必要と考え、最終的には名瀬柳町にあった旧保健所跡地で奄美市水道課が入っている施設の2階に分室を設置することに決めた。分室に常駐する専任教授と特任助教、特任研究員の募集・選考も急がねばならなかった。全国公募を行い、奄美・沖縄の先史時代を研究する高宮広土教授（当時）、サ

ングの仲間を研究する藤井琢磨特任助教（当時）、アマミノクロウサギを研究する鈴木真理子特任研究員（当時）、そして福澤文香事務補佐員（当時）の4名体制で分室を運営することが決まった。分室は鹿児島市の本学から離れているため、孤立しないようにセンター全体で盛り立てる必要があると考え、4人いるセンター専任教員が代わる代わる分室に常駐するシステムをとるようにした（高宮教授は9ヶ月、他の3名の専任教員は各1ヶ月ずつ）。室内の整備も研究協力課と施設部と相談をしながら急ぎ整備を進めた。

平成27年4月25日に朝山毅奄美市長（当時）と前田芳實鹿児島大学学長（当時）をお迎えし、分室前で記念式典を実施し分室のお披露目をした。保岡興治衆議院議員（当時）に施設の説明をさせていただいたことは今でもよく覚えている。その後奄美観光ホテルで記念講演会を実施した。

分室設置は非常に多くの皆様のご理解とご協力の上に成り立っている。あらためてお礼を申し上げたい。10周年を迎えたことは、非常にうれしく思うとともに、将来は国内外の研究者が集え、地元に一層親しまれる分室へと活躍が広がればと願うばかりである。



記念式典の様子。朝山市長（左）、前田学長（真中）、河合 溪（右）

学生奮闘記

甌島列島での植生調査

金子俊太

(教育学部初等教育コース一般 理科)

植物学研究室にて：

「卒業研究でお花畑があるところにも行けるよ、すごくきれいだよ。」

「本当ですか!!じゃあ僕そこに行きたいです!!」

指導教員とのこのやり取りを機に私の卒業研究は始まった。今振り返ると、お花畑だったのは寧ろ私の脳内だったと言わざるをえない。“冒険”を求めて植物学研究室に入ってから野外や離島での調査にも慣れてきたと思っていた矢先、甌島列島での調査は苛烈を極めた。

甌島列島は鹿児島県の西側に位置し、上甌島・中甌島・下甌島の三島で構成されていて、亜熱帯性の植物が分布していることなどが特徴だ。私と研究室の同期はそれぞれ「甌島列島内の草原地帯の動態予測」と「甌島列島内の海岸崖地の植生調査」という研究テーマを以て調査に臨んだ。互いの調査と補助を行うべく、教員の現地での指導と案内の元で私達は甌島列島に初上陸したのだった。島への船は、過去に体感したことがないほどに揺れた。上陸すると、同期が船酔いでダウンしていた。うずくまる同期を傍目に港を散策していると、早速調査のきっかけとなった日本固有種のカノコユリを見つけることができた。未踏の島に上陸した時の高揚感や、図鑑越しに見ていた植物と出会えた時の嬉しさは調査の醍醐味だ。

ところで、私が調査地に選んだ草原に向かうには、木々の生い茂った山を山頂まで登り切る必要がある。山に入ってしばらくすると、海の方から雷雲が見えた。初めて目でくっきりと雷雨の前線がこちらへ迫り来る様子を見た当時の心境には感動と絶望が入り交じっていた。あっという間に激しい雨と雷に包まれた調査地であったが植物学研究室の専門用語辞典には“引き返す”という文字は無い。前を行く教員の背を死に物狂いで追った。

調査地ではライントランセクト及びコドラートを設置し、微地形や群落構造を知るための調査や測量を行う必要がある。到着した山頂の草原では、強烈な風と虫による歓迎が待っていた。私が草原で行う調査のキーワードとして“風衝”があったため前者に関しては目を瞑る(というかそもそも開けられない)として、納得できなかったのはこの草原にいた蚊やブヨ達である。私を刺す比率が明らかに多かった。自然や生物を対象に研究していると解明が難しい疑問にぶつかることもある。今回の調査では他にも、眼下が海の絶壁の上で崖を飛び移ったり、宿泊していたバンガローの一角が水没したりと苛烈のオンパレードが続いた。

だが辿り着いた調査区で見た景色はどれも美しく、休憩で食べたラーメンも、道中の会話も、途中で覚えた植物も全てが彩りを持って心に残った。虫刺されだけは綺麗に消えた。苛烈で、とても楽しい調査だった。正に冒険だった。卒論を製作している時も思い出し何度も顔が綻んだ。

私はこの調査で甌島列島や草原の特徴の一部と、険しい道の歩き方を知ることができた。この先の人生で“お花畑”を目指す時、先行研究として何度も思い出さだろう。



写真1 草原での植生調査の様子



写真2 海岸での植生調査の様子

国際島嶼教育研究センター研究発表要旨

第 243 回 2024 年 11 月 25 日

年輪に着目した樹形形成の可塑性に関する

研究

安田悠子

(鹿児島大学農学部)

樹木は幹の先端にある頂端分裂組織により伸長成長を行うだけでなく、幹の樹皮直下に存在する形成層の分裂により肥大成長する特徴をもつ。これらの分裂組織による成長は長年にわたって継続的・季節的に発生し、樹木の巨大化の根幹となる現象である。亜寒帯から暖温帯に生育する樹木では頂端分裂組織と形成層細胞の分裂活動に 1 年ごとの季節性が認められる。これらの気候帯に生息する樹木の幹の頂端分裂組織は縦方向に梢端を、形成層は放射方向に年輪を毎年形成すると考えられている。しかし、樹木は定着した場所から動くことができないため、生息環境に順応した樹形を形成するようになるが、資源量が十分に無いような環境条件下では、その成長が抑制され、典型的な樹形からかけ離れたものになる。また、成長抑制に伴う樹形の可塑性が起こるとき、樹幹において年輪が正常に形成されない不連続輪という現象が起こることが報告されている。しかしその樹形の可塑性や不連続輪がどのようなプロセスを経て発生するのかは不明である。本発表では、温帯域に分布する樹種を対象として、年輪に着目した樹形形成の可塑性に関する知見を紹介する。



安田悠子 氏

第 244 回 2024 年 4 月 22 日

シマとイモとヒトと

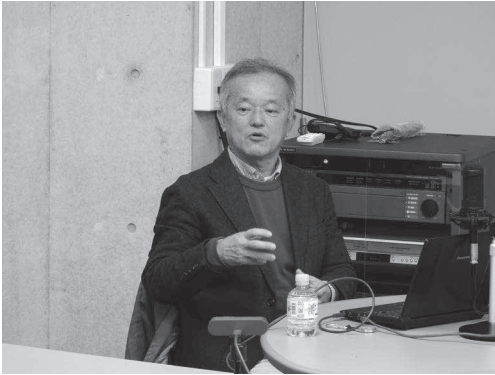
遠城道雄

(鹿児島大学農学部)

イモといえば、ジャガイモ (*Solanum tuberosum* L.) とサツマイモ (*Ipomoea batatas* L. (Lam)) はよく知られているが、ここでは、南西諸島と太平洋島嶼におけるヤマノイモ科ヤマノイモ属のヤマノイモ (*Dioscorea* spp.) とサトイモ科のタロイモ (Araceae family) について解説する。一般的にイモ類は腐敗しやすく、かつ、開花も多くないので、過去に栽培されていた証拠 (花粉や土器への圧痕など) が穀類と比較してもほとんど残らない。最近の研究では、南西諸島での発掘調査が進み、先史時代から堅果類が食されていた証拠が示されるようになっているが、イモ類は見つかっていない。しかし、報告者はこの時代から、イモ類は食料として重要な役割を担っていたのではないかと考えている。

島嶼は海洋という自然の壁があり、外部からの物資移入が不安定であるため、食料確保の観点から、年間を通じて、収穫可能か、長期間貯蔵可能な種類の植物がより必要となる。ヤマノイモとタロイモは、単独では必ずしもこの条件を満たしてはいないが、両者、もしくは、他の作物類を組み合わせることで、かなり、長期にわ

たって、食料供給源となるものと推定される。
さらに、この二つのイモ類は、単に食料としてだけではなく、地域の風習とも結びついている点は大変興味深い。



遠城道雄 氏

第 245 回 2025 年 1 月 20 日
多様な歴史資料から考える沖永良部の近現代
伴野文亮
(「鹿児島県の近現代」教育研究センター)

本報告は、沖永良部島の近現代史の叙述について、多様な歴史資料を分析対象とすることで提示しうる新たな枠組みの可能性を試論するものである。

沖永良部島における歴史研究をめぐっては、近年各方面で新たな展開が隆起している。例えば、和泊町では町制施行 80 周年記念事業として 2021 (令和 3) 年度から新しい町誌を作るための「和泊町の歩み編さん事業」が始まり、2024 (令和 6) 年 5 月に『和泊町の歩み』が刊行された。また、知名町でも町

制施行 80 周年を記念する事業の一環として 2024 年度から新町誌編纂事業がスタートし、2026 (令和 8) 年度までに新町誌が制作される予定である。知名町ではさらに、鹿児島大学法文学部附属「鹿児島県の近現代」教育研究センターと連携して、故弓削政己氏が遺した膨大な文献資料を今後数年間かけて整理・公開していく計画が進行中である。このほかにも、沖永良部島出身者が日露戦争に従軍した際に認めた日記を分析した平井一臣氏による研究など、同島の歴史研究は活況を呈している。

以上のように、近年の沖永良部において歴史研究が進展しているさなかにあつて、今後どのような点に留意して同島の歴史研究、とりわけ近現代史像の深化を試みていくべきか。本報告では、同島に遺る多様な歴史資料を分析対象とすることでうかがえる、沖永良部の近現代史像をより豊かに掘り起こす可能性を考えてみたい。



伴野文亮 氏

島嶼研シンポジウム「地域貢献を地域で考える」

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室設置 10 周年記念「地域貢献を地域で考える」
日 時：2025 年 2 月 15 日 (土) 13:00~17:00
場 所：アマホーム PLAZA (奄美市市民交流センター) マチナカホール
開催方法：ハイブリッド (Zoom ; 先着 90 名、視聴のみ可能)
主 催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
後 援：奄美市、奄美群島広域事務組合、鹿児島県大島支庁、奄美市教育委員会、あまみエフエム、

(6) 島嶼研だより No. 89

鹿児島大学ミッション実現戦略分「奄美群島を中心とした『生物と文化の多様性保全』と『地方創生』の革新的融合モデル」

【趣旨】

奄美群島は社会・文化・生物学的に多様性の高い地域で、世界的に注目を集めています。実際に、奄美大島・徳之島・沖縄島北部・西表島は、2021年7月26日に世界自然遺産に登録されました。一方で、グローバルに、かつ急速に社会経済や自然環境が変化しており、奄美群島の文化と自然の多様性の保全とその多様性維持機構の解明は急務です。そこで、2015年4月1日、鹿児島大学国際島嶼教育研究センターは奄美市に国際島嶼教育研究センター奄美分室を設置し、地元により密着した教育研究活動を推進してきました。今年度で10周年を迎えるため、これまでの奄美分室の活動を振り返るとともに、今後、奄美分室としてどのような教育研究活動を展開していくべきか、地元の皆さま方からご意見をいただきたく、今回のシンポジウムを企画いたしました。

【プログラム】

13:00 開演 司会 山本宗立（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

13:00～13:05 企画説明 山本雅史（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター長）

13:05～14:05 基調講演 高宮広土（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）「奇跡の島々の先史学」

14:05～14:15 休憩

14:15～14:35 牧 貴大（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）「若手研究員からみた奄美分室の役割と研究成果報告―奄美でのコウモリ研究―」

14:35～14:55 佐藤靖明（長崎大学多文化社会学部／鹿児島大学国際島嶼教育研究センター令和5年度客員研究員〔タイプⅠ〕）「奄美大島でのバナナ調査―奄美分室を活用して―」

14:55～15:15 網谷真理恵（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）「離島へき地医療実習による体験を通した学生の学び―地域のつながりの大切さ―」

15:15～15:30 休憩

15:30～16:55 パネルディスカッション

登壇者（敬称略）：安田壮平（奄美市長）、松藤啓介（鹿児島県大島支庁長）、池田忠徳（奄美群島広域事務組合事務局長／鹿児島大学国際島嶼教育研究センター令和6年度客員研究員〔タイプⅡ〕）、平城達哉（奄美市立奄美博物館）、岩井 久（鹿児島大学理事〔企画・社会連携担当〕）、山本雅史（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター長）、講演者4名（高宮広土、牧 貴大、佐藤靖明、網谷真理恵）

16:55～17:00 閉会の挨拶

【要旨】

「奇跡の島々の先史学」

高宮広土

（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

奄美・沖縄諸島の先史学を研究し始めて約30年となった。その駆け出しの頃、よく奄美の研究者に「本土の研究者に協力しても彼らはデータを収集して本土の学会などで発表するだけ、私たちはその内容を知る機会が少ない」としば

しば語られた。そのようななか、研究の「地域還元」を主な目的の一つとして「奄美分室」が2015年4月に奄美市に新設された。奄美分室の大きな特徴は国際島嶼教育研究センターの専任教員が常駐し、研究推進および地域還元を試みる点である。本講演ではまず奄美分室が研究推進や最新研究の地域還元を遂行するためにどのような活動を実施してきたかを紹介したい。

次に講演者自身の研究も十分には地元の方にはお伝えできていない。奄美・沖縄諸島の先史時代（ヒトはいるが文字のない時代）を世界の島々の先史学と比較すると世界稀になる文化現象があったことが明らかになりつつある。簡単にまとめ「旧石器時代にヒトがいた島」「狩猟採集のいた島」「狩猟採集から農耕への変遷のあった島」「自然と調和した可能性のある島」などである。世界の島々ではこのうち一つでも当てはまれば「特筆すべき点」となる。奄美・沖縄諸島の先史時代は一つ以上の「特筆すべき点」があった可能性が判明しつつある。奄美・沖縄諸島のようなこのような文化現象のあった島は他に存在しないかもしれない。

「若手研究員からみた奄美分室の役割と研究成果報告—奄美でのコウモリ研究—」

牧 貴大

（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室は、2015年4月1日に鹿児島大学奄美群島拠点の一つとして設置された。分室ではこれまでに7人の若手研究者が所属し、自身の研究をおこなうとともに研究会主催等の普及啓発活動、出前授業や生物観察会の開催等の教育機会の創出、分室の運営等の多様な側面で奄美大島にて活動をおこなってきた。

本発表では2023年より分室に研究員として勤務している演者が、奄美分室の活動と役割について紹介する。また、演者の専門であるコウモリの生態についての研究も奄美大島にて進めてきており、現在おこなっている洞窟に生息するコウモリに関する調査結果も併せて発表する。

「奄美大島でのバナナ調査—奄美分室を活用して—」

佐藤靖明

（長崎大学多文化社会学部／鹿児島大学国際島嶼教育研究センター令和5年度客員研究員〔タイプI〕）

近年、世界の亜熱帯地域においてバナナの生産が活発になってきているが、奄美のバナナの品種や栽培の傾向はよくわかっていない。そこで、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター令和5年度客員研究員（タイプI：奄美分室利用型）として「奄美大島における熱帯作物栽培の変遷—バナナの学際的アプローチから—」というテーマの研究をおこなった。

バナナの品種特定は、専門家にとっても難しい。形態分類において果実が重要な手がかりだが、その形は育ち方によっても変わってくる。そこで、奄美大島と加計呂麻島の各地で葉片サンプルを採取し、これまでの共同研究で集めた他地域のサンプルと合わせてDNA解析（改良型Flexible ddRAD-seq法）をおこない、系統関係を推定した。

鹿児島大学国際島嶼教育研究センターの奄美分室からは全面的なサポートを受けた。分室と地域社会との信頼関係にもとづいて生産者を紹介・案内していただき、訪問調査をスムーズにすすめることができた。また、サンプルの整理や証拠標本作製のための乾燥作業において、施設を利用させていただいた。

この研究によって、奄美にはさまざまな種組成（ゲノムタイプ）のバナナが持ち込まれていることが明らかになった。また、「シマバナナ」と呼ばれるものが遺伝的に幅があることがわかり、琉球と奄美の間で交流が活発におこなわれてきたことが推察された。

「離島へき地医療実習による体験を通じた学生の学び—地域のつながりの大切さ—」

網谷真理恵

（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）

鹿児島大学医学部では、高い倫理観と社会性に基づいて、地域及び国際社会における自分の役割を認識できる医師を育てることを教育到達目標の1つに掲げている。個人、家族など人のつながりや、地域、文化圏における疾患、医療および社会や人の多様性を理解することで、心理社会背景を含む患者の抱える問題を包括

(8) 島嶼研だより No. 89

的に理解して支援し、患者を尊重した医療の推進ができることにつながる。

このような地域社会に貢献できる医師を育成するために、鹿児島大学医学部では複数の地域医療教育のカリキュラムがある。これらの離島へき地医療実習で、学生たちは、奄美、徳之島、沖永良部、与論などの奄美群島をはじめ、多くの実習場所で実習を行っている。全人的医療は医療だけではなく、人々の生活や社会的背景、心理背景についても包括的な視点が必要となる。



山本雅史国際島嶼教育研究センター長による
企画説明



高宮広土前国際島嶼教育研究センター長



牧貴大奄美分室特任研究員



佐藤靖明長崎大学准教授



網谷真理恵医歯学総合研究科准教授



パネルディスカッションの様子



井戸章雄研究担当理事・副学長による閉会の辞

～フィールドこぼれ話～

結いの島で奄美分室設置 10 周年を迎えて

谷口光代（宮崎大学大学院看護学研究科）

鹿児島県奄美大島において、現在、デング熱に対する知識と蚊への対策について研究を行っています。2025 年 2 月 15 日に、奄美分室設置 10 周年記念シンポジウムが奄美大島で開催されました。ちょうど節目となる 10 周年目の機会に、フィールドこぼれ話の執筆のお話をいただき、何を書こうか考えていたところ、10 年前の奄美分室開設時に「大学院と今の私」というタイトルで高校生向けのメッセージを書かせてもらったことを思い出し、改めて 10 年という歳月の早さに驚かれました。

現在、大学院時代にお世話になった島嶼研の先生方とともに奄美大島をフィールドに研究調査を行えていることに、感慨深い思いでいっぱいです。これまでこの調査で奄美大島に 2 度訪問し、アンケートの協力依頼のために各市町村、施設などを駆け回っています。先生方に地元の方々とのつながりを取り持って下さり、さらに地元の方々が自分のことのように「1 人でも多くの人に調査協力してもらえるように」と熱心に手を貸してくださる姿に、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。地域の方々の協力を通じて、新たなつながりが生まれていくことの大切さを改めて実感しています。印象的だったエピソードのひとつに、奄美分室を訪れた方に聞き取り調査をお願いした際の出来事があります。幼少期の蚊帳の使用について尋ねると、「今も蚊帳が自宅にあるが、今日か明日には捨てる予定」と話されました。奄美大島で使用する蚊帳を見たことがなかったため、処分する前にぜひ見せていただきたいとお願いしたところ快諾いただきました。処分される寸前の蚊帳は本当にゴミ袋にきれいに収められた状態でしたが、取り出されると白と青のグラデーションカラーが非常に美しく、思わず 2 人でその美しさに感動しました。蚊帳を見ながら「孫たちの遊び場としても喜びそうだ」と話され、処分されるはずだった蚊帳はお孫さんたちにお披露目されることになりそうです。お披露目の際には写真を撮って見せもらう約束をしており、次回の再開が今から楽しみのひとつとなっています。このような人とのつながりや、思いもよらなかったエピソードが生まれることこそ、研究の醍醐味だと改めて感じています。

このつながりも奄美分室と奄美大島の 10 年の軌跡が生んだ縁であり、まさに結の精神がかたちになったものだと感じます。記念シンポジウムで高宮先生が話された「これまでの 10 年が土台作りで、これからの 10 年が第一歩のはじまり」という言葉を胸に、これからの 10 年もこれまでお世話になった方々とのつながりを大切にしながら、未来の第一歩を踏み出していきたいです。



写真 1. 予定先に向かう途中に見えるきれいな奄美大島の景色



写真 2. 子どもたちの遊び道具として記憶に残っていくであろう蚊帳

「世界島めぐり」

第十二回 ビスマルク海の都市近郊の離島 (Mush, a small island near Wewak city in the Bismarck Sea, Papua New Guinea)

土井 航（鹿児島大学水産学部）

ニューギニア島とビスマルク諸島に囲まれたビスマルク海は、旧日本軍と連合軍の海戦場として知られる。ビスマルク海に面するパプアニューギニア東セピック州の州都ウェワク市から船外機で移動可能な距離に、大小様々、それぞれに個性的な複数の離島がある。2016年、2017年の訪問時に、ベースキャンプとした Mush Island には、電気ガス水道のライフラインはなく、島民は半農半漁の暮らしをしていた。海では採貝、サンゴ礁での釣り、素潜り漁のほか、刺し網が行われていた。観光客向けのログハウスを製作する計画を聞いていたが、パンデミックを経た現在、実際に営業を開始したようで、島民の生活にも変化が起きている

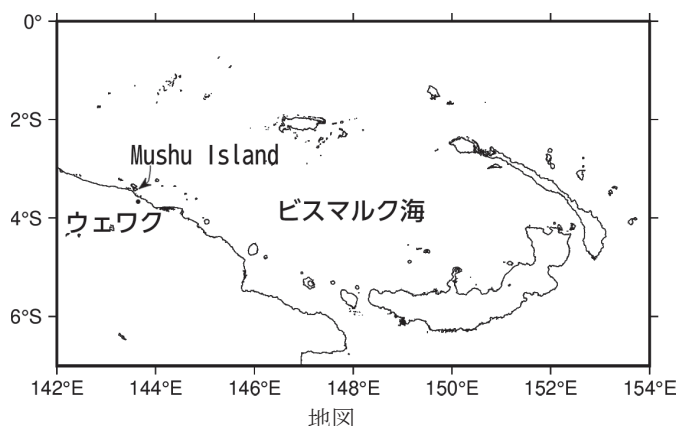


写真1 現地名 Tawani アカ
ガイ族の二枚貝



写真2 高齢の女性と子供の
2人で刺し網を設置している



写真3 水中銃を用いた潜水漁

令和 6 年度出版物

令和 6 年度は South Pacific Studies、News Letter、ブックレットの出版を行いました。

South Pacific Studies

Research Papers

- Garry S.: Analyzing the Evolution of Rascal Gang Culture in Port Moresby, Papua New Guinea, through the Sociological Imagination Lens
- Papoutsaki E. and Kuwahara S.: “Shodansho” - A place for laughter and chatting. A community led response to aging and depopulated small islands in Japan

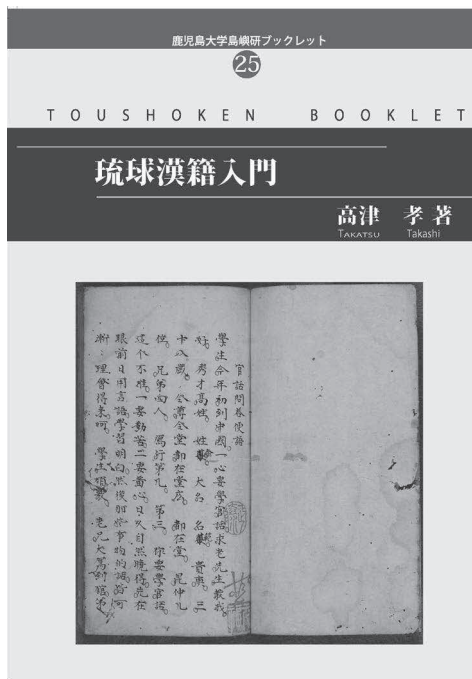
News Letter

- The Past Decade as a Foundation, and the Next Decade as the First Step
- Research Seminars ・ Special seminar
- Recent Publications

ブックレット

No. 25 高津 孝：琉球漢籍入門

No. 26: 平井一臣：ある島人の日露戦争 - 大納宮継「征露日記」を中心に



編集後記

今年も年度末を迎えました。この忙しさは恒例行事だなど思う反面、もう少し準備をしておけば
とを考えます。この反省も恒例のことですね。(KK)

島嶼研だより No.89 令和7年3月7日

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24

電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メール shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>
